

舞台芸術研究

高橋大輔／フェデリコ・フェリーニの『道』

白井 春人（大東文化大学外国語学部）

Une étude en art de la scène *La Strada* — Programme de patinage artistique de Daisuke TAKAHASHI d'après le film de Federico FELLINI

Haruto SHIRAI

はじめに 舞台芸術としてフィギュアスケートを考える

舞台芸術とは、渡邊守章によれば、演劇、オペラ、バレエ、ミュージカル、ダンス、能、歌舞伎、文楽にとどまらず、サーカスをはじめ、普通はスポーツとして扱われるフィギュアスケートや新体操といったジャンルも「身体的競技」ととらえ、「芸術的な洗練が要求されているのだから、身体技のショーだと言っても構わないだろう。」¹とし、この範疇に含まれるとしている。

この言説を基にして、これまでフィギュアスケートの18の「作品」について、原作と実際に演じられたプログラムについて、比較考察を行ってきた。これらの研究によっていずれの「作品」も、フィギュアスケートという採点競技という側面を持ちながらも、素晴らしい舞台芸術作品であったことを証明している。²

「演じる人」（選手）、「演じる作品」（プログラム）、「演じる場所」（アイスアリーナ）、「それを見る人」（観客）という舞台芸術を成立させるための4要素を満たしているからだけではなく、それら各々の「作品」において、渡邊守章が記したように芸術的な洗練さが備わっていたからであろう。

舞台芸術の視点からフィギュアスケートを捉える本稿、今回は高橋大輔がイタリア・トリノの世界選手権を日本人男子として初制覇した2009-10シーズン、FSで演じた『道』をとりあげてみたい。舞台芸術としてこの演技を捉える前に、まずもとなるこの映画作品について概観しておこう。

¹ 渡邊守章『舞台芸術の現在』（放送大学教育振興会、2000年）p.67

² 参考文献表にある、白井春人「舞台芸術としてのフィギュアスケート」（1）～（18）を参照。

1. 映画『道』 *La Strada*

1954年に公開されたこのイタリア映画³は、同年のヴェネツィア国際映画祭サンマルコ銀獅子賞、1956年アカデミー賞外国語映画賞を獲得したフェデリコ・フェリーニ（1920-1993）監督の代表作のひとつである。ストーリーは以下の通りである。

大柄で粗野な旅芸人ザンパノ（アンソニー・クイーン）は、体に巻いた鉄の鎖を手も使わずに「鉄の肺」で切るという力技の大道芸をしていたが、助手の女性が亡くなったため彼女の故郷に向かい、その代わりにすべく、母親から妹のジェルソミーナ（ジュリエッタ・マッシーナ）をわずか1万リラで買いとる。ザンパノとオート三輪で町や村を巡業続けるうち、ジェルソミーナは女道化師として仕込まれていく。

自分勝手に女癖の悪いザンパノの言うことをなんでも聞くしかない頭の弱い彼女は、ある日嫌気がさし彼のもとを離れてしまう。祭りの夜、綱渡り芸人イル・マット（リチャード・ベースハート）の華麗な演技に魅了されるジェルソミーナ。ザンパノは彼女を連れ戻し、2人であるサーカス団と合流する。そこにはザンパノと因縁を持つ男イル・マットもいたのだ。イル・マットはザンパノ出演時からかい、演技の邪魔をする一方、ジェルソミーナにはラッパを教えようとする。ザンパノは我慢の限界に達し、ある日イル・マットをナイフで切りつけ大騒動の警察沙汰になってしまう。

そんな時、イル・マットはジェルソミーナに、「こんな小石でも何かの役に立っているんだよ」と語りかけ、どんな人間にも掛け替えのない命や価値があると教える。

騒ぎの責任を取られ、ザンパノとイル・マットはサーカスを解雇される。

再びザンパノとジェルソミーナの2人だけで大道芸を披露し村々を回る日々。ある日村はずれの路上で自動車のパンク修理をしているイル・マットに偶然出くわす。口論の末ザンパノに殴られたイル・マットは打ち所が悪く死んでしまう。自動車事故に見せかけるためにザンパノは、イル・マットの遺体とともに自動車を川底に落とし、ジェルソミーナとともにその場から立ち去る。その一部始終を見ていたジェルソミーナは、気が変になってしまい、仕事も手につかなくなる。困り果てたザンパノは、ある朝寝ているジェルソミーナを空き地に置き去りにして逃げ出してしまう。

何年か経ち、ある浜辺の街で鎖の芸を披露するザンパノ。しかし年老いて彼の芸は既に精彩を欠いている。ザンパノは、地元の娘が口ずさんでいる曲が、かつてジェルソミーナがラッパで吹いていた曲であることに気づき、彼女の行方について尋ねる。この街にやって来た病気のジェルソミーナが、介護の甲斐も亡くなったことを告げられたザンパノは、酒場で痛飲し街をさまよい海岸に出て、自分の卑しさや孤独を感じ、砂浜に倒れこみ号泣するのだった。

このストーリー展開について川本英明は次のように論じている。

³ 監督：フェデリコ・フェリーニ 脚本：フェデリコ・フェリーニ、トゥッリオ・ピネッリ
撮影：オットー・マルテッリ 音楽：ニーノ・ロータ
製作：ディーノ・デ・ラウレンティス、カルロ・ポンティ
上映時間：108分（モノクロ映画） 日本公開は1957年5月。

この映画の核心部分はジェルソミーナの人物像にある。ジェルソミーナはどんなに貧しく、どんなに惨めであっても、自らの背負った運命に逆らわず、どこまでも誠実に生きようとする。(・・・) 善の魂の象徴であるジェルソミーナが死ぬことで、ザンパノが悪の魂の目覚め、いわば“回心する”といったキリスト教的な構図が読み取れる。⁴

このような伝統的キリスト教的な構図が作品に読み取れることから、映画公開当時、「社会参加」を標榜し、狭義のネオレアリスモ映画に固執する左翼系評論家たちからの評価は低かった。これに対してフェリーニは1955年時点でこう語っている。

近代人として私たちの悩みは孤独感です。そしてこれらは私たちの存在の奥底からやってくるのです。(・・・)『道』は映画が利用しうる手段によって、このようなことを表現しています。それは男と女の、つまりザンパノとジェルソミーナという、生来お互いを理解することなどまずはありそうもないようにみえる人と人との、超自然的な個人的なコミュニケーションを見せようとしているため、自然で政治的なコミュニケーションだけを信じ込んでいる人々によって攻撃されてきたのだと思います。⁵

監督が表現したかったものは、人と人の間においてのみ、孤独を断ち切り、絆をもたらす可能性があるということであろう。

それではこの映画について、監督はどのように構想を思いついたのであろうか？
フェリーニはそのことについて、次のように語っている。

ジェルソミーナと、ザンパノと、この二人にまつわる話が埋められた根には、深く暗い領域にあり、罪悪感、恐れ、より完全な道德律への身を焦がすような郷愁、裏切られた純真さへの嘆きなどに取りまかれている。こうしたことについては話したくない。私の言うことは均衡を欠いた無用なことと思えるからだ。

はっきりしないのだが、自動車に揺られてローマ周辺の野山をぶらぶらと走り回っていた時に、『道』の登場人物や感情や雰囲気は初めてかい間見たように覚えている。⁶

そして、この物悲しい結末を迎える映画『道』が世界中の人々を虜にし、長く人々の心を共感させてきたのは、フェリーニが創り出したモノクロの映像世界だけではなく、ニーノ・ロータの甘く切ないあの音楽に起因していることは言うまでもない。

⁴ 川本英明『フェデリコ・フェリーニ 夢と幻想の旅人』（鳥影社 2005年）p.84

⁵ フェデリコ・フェリーニ著 岩本憲児訳『私は映画だ 夢と回想』（フィルム・アート社、1995年）p.112

⁶ フェデリコ・フェリーニ、ジョヴァンニ・グラッティーニ著 竹山博英訳『フェリーニ、映画を語る』（筑摩書房、1985年）p.88

2. 高橋大輔とは

高橋大輔は、1986年3月16日に岡山県倉敷市に4人兄弟の末っ子として生まれた。幼少時おとなしい性格だったため、心配した両親は、いろいろなスポーツにチャレンジさせた。その中で彼の性格にマッチしたのが、自宅近くのウェルサンピア倉敷のリンクで8歳の時に出会ったフィギュアスケートだった。決して裕福と言えない家庭環境であったが、家族や地元の人々の支えにより、フィギュアスケートを続けていくこととなる。

全国規模の競技会に初めて参加したのは、彼が小学校5年生、1997年10月に翌年オリンピック会場となる長野・ホワイトリングで開催された第1回全日本フィギュアスケートノービス選手権大会⁷であった。この時ノービスAのカテゴリーで4位となった彼は、翌1998年10月に東京・明治神宮外苑アイススケート場で開催された第2回大会では、準優勝を果たす。ご褒美で派遣された初の国際大会は、1999年4月スロバキア・イエセニツェのトリグラフトロフィー。ノービスボーイズで優勝を果たす。また毎年7月に長野県野辺山で開催されていた日本スケート連盟の全国有望新人発掘合宿では既にその非凡な才能を発揮してはいたが、まだプロコーチにはついていなかった。

紆余曲折の末、生涯の師となる長光歌子と出会うのは、ジュニアのカテゴリーにあがる1999-2000シーズン夏のことであった。このシーズン初出場した大阪の全日本ジュニアで3位となり、2000-01シーズンにはジュニアGPシリーズにも派遣されるようになる。⁸しかしこの年の全日本ジュニアでは4位となり表彰台を逃すが、全国中学校スケート大会では2連覇を果たす。高校は倉敷翠松高校に進学、平日は倉敷、週末は大阪の長光のもとに練習に通う生活が続く。

2001-02シーズンは大きく飛躍する年となる。プログラムの振付を海外の振付師に依頼する。⁹ジュニアグランプリでは好成績を収め¹⁰、スロベニア・ブレッドでのファイナルにも初進出し、4位となる。国内では全日本ジュニア（東京・明治神宮外苑）を初制覇、シニアの全日本選手権（大阪）でも5位の成績を収める。そしてノルウェー・ハーマルで開催された世界ジュニア選手権では、初出場ながら日本人男子として初の優勝を果たした。

2002-03シーズンから本格的にシニアに参戦するもなかなか国際大会では好成績を得られなかった。¹¹全日本選手権（京都）4位、四大陸選手権（中国・北京）では13位に終わる。このころ日本スケート連盟から海外研鑽の機会がもたらされ、高橋は長光とともに欧米の著名な指導者の門をたたき、カナダのダグ・リー、アメリカのリチャード・キャラハン、ロシアのヴィクトール・クドリヤ

⁷ 男女シングルの場合、スケート年齢（基準日が7月1日のため6月30日現在の年齢）が、11歳～12歳がノービスAクラス、9歳～10歳がノービスBクラスに分かれる。

⁸ 2000-01シーズン派遣されたJGPウクライナ大会8位、中国・ハルビン大会9位。

⁹ 振付師：ロバート・ダウ SP ミュージカル『ウエストサイド・ストーリー』（バーンスタイン作曲）FS『バイオリン協奏曲第1番』（ブルッフ作曲）

¹⁰ JGPソフィア大会2位、SBC杯（長野）優勝。

¹¹ GPドイツ大会（ゲルゼンキルヘン）11位、NHK杯（京都）8位。このシーズンの振付師はリー・アン・ミラー。SP『ヒーローズ・シンフォニー』（グラス作曲）FS 映画『スターウォーズ エピソード2』

フツェフ、タチアナ・タラソワなどである。

2003-04 シーズンは、振付をタチアナ・タラソワに依頼し¹²、全日本選手権（長野）で初めて3位となり表彰台に上る。このシーズンから従来の6.0の採点システムから、現行の新採点システムに移行されたグランプリ・シリーズにおいてはまだ表彰台に上ることは出来なかった¹³。2度目の出場となった四大陸選手権（カナダ・ハミルトン）では6位となり、初の世界選手権代表となる。ドイツ・ドルトムントで開催された世界選手権では予選7位、SP11位、FS11位となり最終成績も11位であった。

関西大学に進学し、兵庫県尼崎市にある長光の家に下宿することになった。2004-05 シーズン¹⁴は、環境の変化やシーズン前半に足首の怪我をしたことも影響し、全日本選手権（新横浜）では6位に沈むも、年明けのユニバーシアード（オーストリア・インスブルック）で優勝、四大陸選手権（韓国・江陵）では3位と持ち直す。しかし翌年のトリノオリンピックの枠取りとなる世界選手権（ロシア・モスクワ）では、SP7位であったがFSでジャンプの転倒が重なり15位に終わる。¹⁵これにより日本男子のオリンピック出場枠は最少の1枠となった。この世界選手権の後、シニア参戦後プレッシャーに弱く「ガラスの心臓」の持ち主とも呼ばれた高橋を変えるべく長光は、コーチ・振付師にニコライ・モロゾフ、トレーナーにカルロス・アビラデボルバを迎えることにした。このあとモロゾフとの3シーズンが、高橋にとって大きな転機となったのは間違いない。

2005-06 シーズン、グランプリ・シリーズ アメリカ大会（アトランティックシティ）優勝、NHK杯（大阪）3位となり、初めて出場を果たしたグランプリ・ファイナル（東京）でも3位¹⁶と、早くもその効果があらわれた。モロゾフは「おまえは1番になる器の持ち主だ」¹⁷と高橋に自信と高い目標を持たせた。全日本選手権でも初優勝を果たし、トリノオリンピック代表にも選出された。オリンピックではSP5位（73.77）、FS9位（131.12）、最終順位8位（204.89）入賞を果たしたがメダルには届かなかった。¹⁸

2006-07 シーズン グランプリ・シリーズ カナダ大会（ビクトリア）2位、NHK杯（長野）優勝し、2季連続出場したファイナル（ロシア・サンクトペテルブルグ）でも体調不良の中滑り切り2位となった。全日本選手権では他を寄せつけず2連覇を果たす。続くユニバーシアード（イタリア・トリノ）でも2連覇を達成。世界選手権（東京）では、SP3位（74.51）FS1位（163.44）合計

¹² SP 映画『ミッション・インポッシブル』、FS『パガニーニの主題による狂詩曲』『パガニーニの主題による変奏曲』（ラフマニノフ作曲）

¹³ GP カナダ大会7位、フランス大会5位。

¹⁴ このシーズンも振付師はタラソワ。SPは当初は『剣の舞』（ハチャトリアン作曲）だったが、前年のものに戻す。FS『アランフェス協奏曲』（ホアキン・ロドリーゴ作曲）

¹⁵ ともに出場した本田武史が途中棄権したため、高橋1人の順位による枠取りとなった。

¹⁶ GP ファイナル日本人男子初のメダリスト。

¹⁷ 原真子『STEP！STEP！STEP！高橋大輔 フィギュアスケートを行く』（日本経済新聞出版社、2011年）p.47

¹⁸ 振付師：ニコライ・モロゾフ SP 映画『ムーラン・ルージュ』より『ロクサーヌのタンゴ』 FS『ピアノ協奏曲第2番』（ラフマニノフ作曲）

237.95 で、ブライアン・ジュベール（フランス）240.85 に次いで 2 位となる。¹⁹

2007-08 シーズン グランプリ・シリーズ アメリカ大会（レディング）、NHK 杯（仙台）ともに優勝。ファイナル（イタリア・トリノ）は、優勝したステファン・ランビエル（スイス）にわずか 0.26 及ばず 2 位。全日本選手権（大阪）では FS で 4 回転ジャンプを 2 回成功させて、大差で 3 連覇を達成する。四大陸選手権（韓国・高陽）の FS でも 4 回転ジャンプを 2 回成功させて FS175.84、合計でも 264.41 と当時の ISU 最高得点を獲得し初優勝を果たす。優勝候補筆頭にあげられた世界選手権（スウェーデン・ヨーテボリ）では、FS でジャンプミスや回数違反などにより 4 位に終わる。²⁰そしてこのシーズンをもってニコライとの契約を解除することになる。それは多くの選手を抱えるようになったコーチに対して「自分を 1 番に見てほしい」²¹という願いがかなわなくなったからである。

2008-09 シーズンは欠場を余儀なくされる。10 月練習中に 3 回転アクセルで転倒し右足の前十字靭帯と半月板を損傷するという大怪我を負ったためである。11 月に手術、その後リハビリをおこない、氷上に再び立ったのは 2009 年 4 月、ジャンプ練習を再開したのは 6 月のことであった。モロゾフ・チームを離れた高橋は、あらたに「チーム大輔」を作ることになる。長光コーチ、あらたにジャンプコーチとして本田武史、コンディショニングトレーナーとして渡部文緒、振付師、栄養士、マネージャー、衣装、音楽編集など総勢 10 名以上が、高橋大輔のために働くのだ。

2009-10 シーズン 10 月のフィンランディア杯（ヴァンター）優勝で国際大会に復帰。グランプリ・シリーズ NHK 杯（長野）4 位、カナダ大会（キッチナー）2 位、ファイナル（東京）5 位。全日本選手権（大阪）では 4 度目の優勝を果たし、バンクーバーオリンピック代表に選出される。オリンピックでは、SP90.25 で 3 位ながら、1 位のエフゲニイ・プルシェンコ（ロシア）にわずか 0.6 差。FS では 4 回転トゥループの転倒のほか細かなジャンプミスがあり 156.98 の 5 位となったが、総合では 247.23 となりステファン・ランビエル（スイス）にわずか 0.51 差をつけ 3 位となり、フィギュア日本人男子初のオリンピックメダリストとなった。オリンピック男子上位 8 選手の最終成績は次表の通りである。

¹⁹ 振付師：ニコライ・モロゾフ SP『ヴァイオリン協奏曲』（チャイコフスキー作曲）FS ミュージカル『オペラ座の怪人』

²⁰ 振付師：ニコライ・モロゾフ SP『白鳥の湖（ヒップホップ・アレンジ）』（チャイコフスキー作曲）FS『ロミオとジュリエット』（チャイコフスキー作曲）

²¹ 原真子 前掲書 p.51

バンクーバー オリンピック 男子最終成績²²

FPI.	Name	Nat.	Points	SP	FS
1	LYSACEK Evan	USA	257.67	2	1
2	PLUSHENKO Evgeni	RUS	256.36	1	2
3	TAKAHASHI Daisuke	JPN	247.23	3	5
4	LAMBIEL Stephane	SUI	246.72	5	3
5	CHAN Patrick	CAN	241.42	7	4
6	WEIR Johnny	USA	238.87	6	6
7	ODA Nobunari	JPN	238.54	4	7
8	KOZUKA Takahiko	JPN	231.19	8	8

3. 高橋大輔の『道』

話を少し前の時点に戻そう。大怪我をする前に、「チーム大輔」は、2008-09 シーズンのために新しい振付師を用意していた。SP が宮本賢二²³、FS がパスカーレ・カメレンゴであった。カメレンゴが最初に選んだ曲は、ジョージ・ウィンストンのピアノ曲『オーシャン・ウエーブ』であった。しかし長光はフェリーニの映画『道』のメインテーマを使ったプログラムを依頼した。その時の様子を長光はインタビューで次のように答えている。

「でも、私はなぜか『道』がええなあ、と。それをパスカーレに伝えると、イタリア人だからやっぱりこの曲が良く使われるのを知っているから、『またか』っていう表情をして（笑）。でもやっぱり私も譲れないからお願いして・・・」²⁴

こうして長光コーチの強い思い入れから出来上がったプログラムが、競技会で高橋によって演じ

²² www.isureresults.com/results/owg2010/CAT001RS.HTM（2023 年 9 月 1 日閲覧）

²³ 『eye』（Coba 作曲）

²⁴ 坂上武司「高橋大輔の「道」をたどって 「かなだい」のマチネとソワレの間に」（朝日新聞 2022 年 8 月 25 日）
確かにこの曲は、2001-02 シーズンのまだ 20 歳だったジェフリー・バトル（四大陸選手権優勝、世界選手権 8 位）をはじめとして、数多くのスケーターによって演じられてきた。

られるまでには、さらに 1 年の歳月が必要だったのは既述の通りである。

オリンピックに続き出場した世界選手権（イタリア・トリノ）における FS『道』の演技構成は以下の通りである。

世界選手権における高橋大輔の演技構成

音楽・演技時間	No	演技内容		基礎点	GOE	パネルスコア
0:00	演技開始					
0:23	①	4 F<		5.50	− 1.60	3.90
0:43 - 0:45	②	3 A + 2 T		9.50	1.60	11.10
1:05	③	3 Lo		5.00	1.20	6.20
1:11-1:22	④	FCSSp4		3.00	0.10	3.10
1:35 - 2:05	⑤	CiSt4		3.90	2.00	5.90
2:32 - 2:34	⑥	3F+3T	×	10.45	− 0.20	10.25
2:44	⑦	3S	×	4.95	0.00	4.95
3:05	⑧	3A	×	9.02	2.00	11.02
3:16	⑨	3Lz !	×	6.60	0.00	6.60
3:32 - 3:34	⑩	2A+2T	×	5.28	0.20	5.48
3:36 - 3:49	⑪	FCCoSp4		3.50	0.10	3.60
3:53 - 4:20	⑫	SiSt4		3.90	1.80	5.70
4:23 - 4:38	⑬	CCoSp4		3.50	0.60	4.10
4:39	演技終了			74.10		81.90

SP1 位で FS を迎えた彼は 4 年前のオリンピックのリンクで同じ 24 番目の最終滑走を引き当てた。藤田澄子デザインのグレーと白のギンガムチェックのブラウスに赤と濃紺のベストという道化師を想起させる衣装をまといリンクにあらわれ、静かに眼を閉じ、首をやや右に傾げスタート位置につ

く。ニーノ・ロータの郷愁を誘うトランペットの調べがなると、まるで眠りから覚めたようによろけながら横に5メートルほど動き出す。リンクを半周して、最初にして最大難易度のジャンプ4回転フリップに挑む。

判定は回転不足のマーク（<）がつき着氷も両足となるが、GOE（ジャッジの出来栄評価）²⁵は-1.60にとどまる。この時点では4回転フリップは男子でも史上初の大技への挑戦であった。これまでの大会では最初のジャンプはより易しい4回転トゥループに挑むも、いずれも回転不足をとられていた。場内の観客からは驚きの歓声があがる。

続く3回転アクセル+2回転トゥループのコンビネーションジャンプは高さ・幅とも申し分なく踏切・着氷もスムーズでGOE+1.60の高評価。シーズン当初は後半部に入れていた3回転ループをここに入替流れがよくなった（GOE+1.20）。2度目のメインテーマが始まるタイミングでフライングエントリーの足替えありのシットスピンに移る。姿勢が明確で音楽にもあっている。最高評価レベル4 GOE+0.10。続くサーキュラステップは、明るい曲想にのせ多彩なステップ、ターン、全身を大きく使い、サーカスの綱渡りを思い起こさせる動きなど独創的な身のこなしも随所に見られレベル4 GOE+2.00とこのエレメンツも極めて高評価を得るとともに、観客からは大きな拍手子が沸き起こる。

そしてジャンプの基礎点が1.1倍となる後半部へ。曲もアップテンポになり、勝負のジャンプが連続して5つ続く。3回転フリップ+3回転トゥループの連続ジャンプはセカンドジャンプの着氷時に軽くフリーフットがついたためGOE-0.20。3回転サルコウは問題なく着氷。

リンクを一周して2回目の3回転アクセルにも成功。無駄な力が全く入っておらず、スムーズに流れる（GOE+2.00）。最後の3回転ジャンプはルッツ、技術役員からは踏切が怪しいとの判定の印（!）がつくが、9人のジャッジの評価は分かれ²⁶、GOEは0.00となる。そして最後のジャンプ、2回転アクセル+2回転トゥループの連続ジャンプも余裕をもって軽やかに決める（GOE+0.20）。そして直ちにフライングエントリーの足替えありのコンビネーションスピンへ。シットポジションから足替えしてキャメルポジションへさらにアップライトへと変形させていく。まったく無駄な力が入っておらず、音楽にもあっている（レベル4 GOE+0.10）。ストレートラインステップはリンクの端から端まで深いエッジワークで、明確なターン、ステップ、全身を大きく使いメインテーマのエンディングを歌い上げるようなパフォーマンスに観客は熱狂する。レベル4でGOE+1.80の高評価。そして最後のエレメンツ 足替えのコンビネーションスピン（レベル4 GOE+0.60）が始まる頃には、観客は立ち上がり大歓声で、新チャンピオンの誕生を祝福した。

²⁵ 現行の採点システムではジャンプの回転数やステップ・スピンのレベルについては3人の技術役員が合議で決定。レフェリーの監督下、ジャッジは各々の技の出来栄（2010年当時は+3～0～-3の7段階、現在は+5～0～-5の11段階で評価）と全体のプログラムを項目ごとに（2010年当時は5項目、現在は3項目）に0.25刻みの10点満点で点数を入力する。このためビデオリプレイが出来るPCが、各技術役員・審判団の机上に用意されている。

²⁶ 9名のジャッジでGOE+1が3名、0が3名、-1が3名。

www.isuresults.com/results/wc2010/wc10_Men_FS_Scores.pdf（2023年9月1日閲覧）

プログラムコンポーネンツスコアにおいても、高橋の得点は当時としては大変高く、おおむね 8.50 以上の評価を得ていた。

この大会の男子 FS および最終成績上位 6 名の得点詳細は次の通りである。

2010 世界フィギュア選手権大会 男子 FS 成績²⁷

Pl.	Name	Nation	TSS	TES	PCS	SS	TR	PE	CH	IN	Ded.	StN.
			=	+	+						-	
1	Daisuke TAKAHASHI	JPN	168.40	81.90	86.50	8.70	8.45	8.60	8.70	8.80	0.00	#24
2	Patrick CHAN	CAN	159.42	78.02	82.40	8.35	8.15	8.15	8.30	8.25	1.00	#22
3	Michal BREZINA	CZE	154.31	77.21	77.10	7.80	7.45	7.75	7.85	7.70	0.00	#23
4	Brian JOUBERT	FRA	154.04	73.84	81.20	8.35	7.80	8.15	8.05	8.25	1.00	#21
5	Adam RIPPON	USA	151.36	77.16	74.20	7.60	7.20	7.50	7.40	7.40	0.00	#16
6	Jeremy ABBOTT	USA	151.05	77.15	75.90	7.65	7.45	7.60	7.60	7.65	2.00	#19

TSS：合計点 TES：技術点（トータルエレメンツスコア）：13 のエレメンツの総和

PCS：演技構成点（トータルプログラムコンポーネンツスコア）：以下 5 要素の総和

SS：スケート技術 TR：繋ぎ PE：パフォーマンス CH：振付 IN：音楽表現

2010 世界フィギュア選手権大会 男子 最終成績²⁸

Pl.	Name	Nation	Points	SP	FS
1	Daisuke TAKAHASHI	JPN	257.70	1	1
2	Patrick CHAN	CAN	247.22	2	2
3	Brian JOUBERT	FRA	241.74	3	4
4	Michal BREZINA	CZE	236.06	5	3
5	Jeremy ABBOTT	USA	232.10	6	6
6	Adam RIPPON	USA	231.47	7	5

²⁷ www.isureresults.com/results/wc2010/SEG002HTM（2023 年 9 月 1 日閲覧）

²⁸ www.isureresults.com/results/wc2010/CAT001RS.HTM（2023 年 9 月 1 日閲覧）

4. まとめにかえて

高橋大輔はこのプログラムで映画『道』の果たして誰を演じているのだろうか？

強欲で女好きのザンパノではないし、頭の弱くただ待つだけの女ジェルソミーナでもない。それでは、ジェルソミーナにやさしく接するが、ザンパノに殺害されてしまうイル・マットなのか？それも到底考えられない。

これまでの研究では、フィギュアスケートのプログラムは再現・代行型の「作品」が多く、スケーターは原作の誰かを演じていた。たとえば、カタリナ・ピットの『カルメン』、荒川静香の『トゥーランドット』、羽生結弦の『オペラ座の怪人』がそうだった。しかし、このプログラムには当てはまる登場人物は存在しないと言わざるを得ない。

ニーノ・ロータの映画音楽の物悲しい旋律にインスピレーションを得て、振付師パスカーレ・カメレンゴは高橋のために、直接的身体表現を重視したプログラムを構築したと言えよう。それは、何としても高難易度の4回転ジャンプを成功させたいという高橋の高い志とも合致し、トリノの地で結実したと言えよう。

孤独なこの世界で、他人のことなど理解しえない、しかし人間同士でしか理解しえないという深遠な映画『道』のテーマ。「こんな小石でも何かの役に立っているんだよ」

サーカスの道化のような衣装を着た高橋は、その場に集まった人々を楽しませるために演技を行う。そしてこの曲のプログラムを渴望した恩師長光のためにも。そして高橋は日本人男子として初めて世界選手権王者となった、第100回の世界選手権で。人間の喜怒哀楽の全てをこのプログラムを通して演じた。モロゾフとの別離、大怪我とそこからの復活という高橋大輔が、自らのスケート人生そのものを演じた作品が、この『道』であったとも言えるのではないだろうか。

その後、高橋は28歳となる2013-14シーズンまで現役を続け、その間に5度目の全日本選手権優勝（2011-12シーズン）、3度目のオリンピック出場（2014ソチ6位）を果たした。一旦引退しTVコメンタリーやダンサーなどを経験したのち、2018-19シーズンから2シーズンにわたりシングルスケーターとして復活した。そして2020-21シーズンから3シーズンは村元哉中と組んでアイスダンスにも挑戦し、全日本選手権では2022-23シーズンには優勝を果たすとともに世界選手権（さいたま）では11位と過去日本のカップル最高位タイを記録したことはまだ記憶に新しい。アイスダンス競技からも同シーズンをもって引退し、プロスケーターとして新たな「道」を歩みはじめている。

*貴重な写真をご提供いただいたジャパンスポーツの菅原正治氏にここにお名前を記し、深く感謝申し上げます。

参考文献：

渡邊守章『舞台芸術の現在』（放送大学教育振興会、2000年）

フェデリコ・フェリーニ著 岩本憲児訳『私は映画だ 夢と回想』

（フィルム・アート社、1995年）

フェデリコ・フェリーニ、ジョヴァンニ・グラッティエーニ著 竹山博英訳『フェリーニ、映画を語る』

（筑摩書房、1985年）

フェデリコ・フェリーニ監督『道』DVD BETA（WOWOW プラス、2023年）

Federico Fellini Nino Rota “*La Strada & Nights of Cabiria*” CD（Cherry Red Records, 2007）

高橋大輔 OFFICIAL BOOK『2000days バンクーバーまでの闘い』（祥伝社、2010年）

原真子『STEP！STEP！STEP！高橋大輔 フィギュアスケートに行く』

（日本経済新聞出版社、2011年）

坂上武司「高橋大輔の「道」をたどって 「かなだい」のマチネとソワレの間に」

（朝日新聞 2022年8月25日）

白井春人 舞台芸術としてのフィギュアスケート（1）

「2つの『カルメン』 カタリナ・ビットとエフゲニー・ブルシェンコ」

Ice Jewels Vol.1 p.88～91（舵社、2015年10月）

白井春人 舞台芸術としてのフィギュアスケート（2）

「栄光の『トゥーランドット』太田由希奈と荒川静香（その1）」

Ice Jewels Vol.2 p.88～91（舵社、2016年2月）

白井春人 舞台芸術としてのフィギュアスケート（3）

「栄光の『トゥーランドット』太田由希奈と荒川静香（その2）」

Ice Jewels Vol.3 p.90～93（舵社、2016年5月）

白井春人 舞台芸術としてのフィギュアスケート（4）

「『ウイリアム・テル』スイスの英雄 ステファン・ランビエル」

Ice Jewels Vol.4 p.82～84（舵社、2016年10月）

白井春人 舞台芸術としてのフィギュアスケート（5）

「『ドン・キホーテ』本田武史の「見果てぬ夢」

Ice Jewels Vol.5 p.86～87（舵社、2017年2月）

白井春人 舞台芸術としてのフィギュアスケート（6）

「『ドン・キホーテ』〈その2〉ジョン・カリーの栄光」

Ice Jewels Vol.6 p.92～93（舵社、2017年5月）

白井春人 舞台芸術としてのフィギュアスケート（7）

「『ダルタニヤン』伝説の銃士 フィリップ・キャンデロロ」

Ice Jewels Vol.7 p.94～95（舵社、2017年11月）

白井春人 舞台芸術としてのフィギュアスケート (8)

「オクサナ・バイウルの『白鳥の湖』」

Ice Jewels Vol.8 p.88～89 (舵社、2018年4月)

白井春人 舞台芸術としてのフィギュアスケート (9)

「アレクセイ・ヤグディンの『仮面の男』」

Ice Jewels Vol.9 p.110～111 (舵社、2019年1月)

白井春人 舞台芸術としてのフィギュアスケート (10)

「村主章枝のラフマニノフ『ピアノ協奏曲第2番』」

Ice Jewels Vol.10 p.94～95 (舵社、2019年5月)

白井春人 舞台芸術としてのフィギュアスケート (11)

「ジョニー・ウィアの『瀕死の白鳥』」

Ice Jewels Vol.11 p.94～95 (舵社、2019年12月)

白井春人 舞台芸術としてのフィギュアスケート (12)

「安藤美姫のメンデルスゾーン『ヴァイオリン協奏曲』」

Ice Jewels Vol.12 p.94～95 (舵社、2020年4月)

白井春人 舞台芸術としてのフィギュアスケート (13)

「浅田真央の『くるみ割り人形』——妖精の戴冠」

Ice Jewels Vol.13 p.94～95 (舵社、2021年3月)

白井春人 舞台芸術としてのフィギュアスケート (14)

羽生結弦の『ノートルダム・ド・パリ』——絶対王者への出発点

Ice Jewels Vol.14 p.78～79 (舵社、2021年6月)

白井春人 舞台芸術としてのフィギュアスケート (15)

「ミッシェル・クワンの『トスカ』——旧採点の女王 最後の6.0満点の演技」

Ice Jewels Vol.15 p.94-95 (舵社、2022年1月)

白井春人 舞台芸術としてのフィギュアスケート (16)

「伊藤みどりのラフマニノフ『ピアノ協奏曲』——伝説のトリプル・アクセル」

Ice Jewels Vol.16 p.78-79 (舵社、2022年4月)

白井春人 舞台芸術としてのフィギュアスケート (17)

「羽生結弦の『パリの散歩道』——オリンピック 金メダルへの道」

Ice Jewels Vol.17 p.66-67 (舵社、2022年10月)

白井春人 舞台芸術としてのフィギュアスケート (18)

「羽生結弦の『オペラ座の怪人』——音楽はひそかにお前を虜にする」

Ice Jewels Vol.18 p.86-87 (舵社、2023年7月)



高橋大輔『道』（2010 世界フィギュアスケート選手権大会・イタリア トリノ） © ジャパンスポーツ 菅原正治